

斷枝片葉 (其二十五)

タモノデアアル、武田博士ノモノト出現ノ現象ヲ異ニスルガ多クノ場合ヲ一々寫シタラ種々ナル形狀ニ接スルコトガ出來ルコト、思ハレル又其出現ノ部分ニ就テモ莖ノ基部ニ多キハ勿論デアラウガ亦其上部ニ於テモ尙出現シ得ルコトハ此寫真ガ説明シテ居ル、近畿地方ニ産スルみかへりさうニモ同様ノ現象ガ現ハレルトノコトデア
ルガ余ハマダ之レヲ見タコトガナイ

○斷枝片葉 (其二十五)

牧野富太郎

●あらかしノ實カラ製シタ食料

是レハ大正十三年九月ニ紀州湯ノ峯デ聞ク所デアアルガ此地昔ハ何レノ家デモあらかし (*Quercus glauca* THUNB.) ノ實ヲ拾ヒ集メ其實ヲ一顆々々木製ノ圓盤上デ木槌デ敲キ割リ之レヲ籠ニ入レ川ノ流レニ晒ス事數日斯クシテ果皮ヲ流シ去リ又滋味ヲ除キ後之レヲ日ニ干シテ貯ヘル斯クスレバ何十年立ッテモ蟲モ食ハズ無事ニ藏シ置ク事が出來ル之レヲ久シク貯ヘルニハ澁紙ノ囊ニ入レ更ニソレヲ俵ニ收メテ置ク用ウル時ハ先ヅソレヲ水ニ漬ケテ柔カクシ味噌汁ノ中ヘ入レテ食スル今日デハ世ガ開ケ此様ナ用意ヲスルコトハ自然ニ廢絶シタガ然シ今デモ土地ノ舊家ニハ尙昔カラ貯ヘ來タモノヲ藏シテ居ッテ私ハ其少許ヲ貰ヒシガ其狀一タビ春イタモノガ固マッタヤウナ不定形ヲナシ黒ミガカリテ硬ク蒸シテ干シタト思ハル、モノデア
ツタ ●暖皮ノ一種 私ハ明治四十三年八月二十六日大隅佐多村伊坐敷デ同地ノ住人永山新太郎君カラ
見事ナ暖皮ノ一切レヲ貰ヒ受ケタ厚サハ殆ンド一分ホドアッテ褐色ヲ呈シ膚ハ平滑デ質ハ極メテ緻密デマルデ
獸皮ノ様デアアル是レハ同地ノ大ナルゆすのき (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) ノ材ト樹皮トノ間朽チタ處
ニ生ジ長サハ凡ソ六尺幅ハ凡ソ四尺程アッテ明治四十二年ニ見ダシテ採ツクモノデアッタ私ハ歸京後川村清
一博士ヘ其一片ヲ頒ツタガ其菌ノ名稱ガ同君ノ研究ニヨッテ一日モ早く明ニナランコトヲ希望シテ居ル、本品

ハ菌絲ガ密ニ錯綜シテ出來タ者デ此謂ユル暖皮ヲ作ル菌ハ必ズシモ一種デハナク其菌種ニヨリ厚薄粗密硬軟ノ度ガ種々アルノデアラウト思フ、中ニハ之レヲ利用シテ琴ノ袋ヲ造ツタ事ナド明治十二年三月ニ博物局デ出版シタ『博物雜誌』第三號ニアル暖皮ノ記事中ニ出テ居ル又其文中ニ天保年間ニモ薩州デゆすカラ出タ事モ見エテ居ル又『洞桃遺筆』ニモ暖皮ノ記事ガアル

●よじろ

石見ノ國ノ山間僻陬ノ片田舎デハ今モ尙ホ土

言ニよじろト呼ブモノヲ燈火用ニ使ツテ居ルガ追々電燈ナドガ點ク様ニナルト此シナモノハ段々ニ亡クナル此よじろハ山人ナドガ春、山地ニ行キテ其處ニ多キ松樹ヲ傷ケ盛^{さか}ニ松脂ヲ流レ出サセ置キ夏ノ初メ頃ニ至テ其レヲ採リ集メ來リ湯ニ入レテ柔クシ之レヲ揉ミテ一尺位ノ長圓キ棒トシタモノデ之ヲ竹ノ葉ニ包ミソレヲ臺ニ立テタ丸竹ニ挿シ込ミ火ヲ點シ燈火用トスル

●ぜんまい往々夏時ニニ形葉ヲ出ス

我邦產ノぜんまい

(*Osmunda japonica* [Thunb.]) ハ裸葉ト實葉トガ全然別デ其レガ春一緒ニ株カラ抽キ出デ其實葉ハ新葉ノ尙展開セヌ前ニ已ニ成熟シ始メ漸々拳ヲ解クノデアアル斯ク裸實兩葉ノ分ル、ノガ本種本來ノ常態デアアルガ夏時動モスルト其裸葉ノ上部ガ實葉トナツテ恰モ西洋ぜんまい (*O. regalis* L.) ヲ見ルノ觀ガアルガ是レハタゞ一時ノ變態デ固ヨリ二種アル譯ノモノデハナイ、FRANCHET ET SAVATIER 合著ノ *Enumeratio Plantarum Japonicarum* 第二卷第二百五十頁ニ *Osmunda regalis* L. *a. typica*. HAB. circa Yokoska rarissima (Savater, n. 1608). ト出テ居ルモノハ即チ正ニ此變態葉ヲ基トシテ書イタモノデアアルコトガ想像ニ難クナイ故ニソレハ無論 *O. regalis* L. ノ *typica* 品デハナイ

●「コルク」樹我日本ニ始テ渡來ノ件ニ就キ大島圭介氏ノ書翰

『拜啓別包ニ差上候

亞弗利加洲アルゼリア產ノオーク樹ノ一種^{皮ハ蠟ノ口栓ニ用ルモノ}ニテ最巨大ノ者ノヨシ、此頃佛人某ヨリ苗木三兩本貰請候間稍末少々切取入御覽候右ハ小子園中ニ植有之候間根付候ハ、一本呈上可仕候右ハ既ニ御承知ノ儀ト奉存候得共警視局雇佛人所持ノ由ニテ手ニ入候間不取敢差上申候 佛國產ノモノハ右ト大同少異ノ由是モ此度佛國へ歸候人ニ托シ種實取寄候筈多分來春一月頃迄ニ着可致候間其節亦御配分可仕候也 十月十五日 圭介 田中芳男様、此日附十

月十五日ハ明治十二年ノデアル是レデこるく樹 (Cork Oak) 即チ *Quercus Suber* L. ノ生本ガ始テ我日本ニ入ッ
タ徑路ガ能ク分ル、然シ本樹ハ餘リ我風土ニ適セヌト見エ爾後今日ニ至ルモ敢テ其大樹ヲ邦内ニ見タコトガナ
イガ此有用樹ガ若シ能ク我邦ニ慣レテ發育ヲ遂ゲタナラ國家ノ爲メ幸デアッタラウト思フガ残念ナコトニハ今
日ソシナ好結果ハ將チ來サレテ居ナイノデアル

●また、びノ實併ニ薔ノ鹽藏

また、び鹽漬ノ實ニ就

キ曾テ田中芳男先生ノ筆記シ置カレタモノヲ紹介スル、曰ク『十七年「明治」九月十二日越後南魚沼郡六日町
ニテ得ル所食シテ辛味アリ雅品トス此長形ナルハ正形ニシテ短ク癭瘰狀ヲナスハ虫ノ爲メニ本形ヲ失ヒシモノ
ナリ但シ共ニ食味ニ異ルコトナシマタ、ビ實熟スルハ形棗子ノ如ク尙一層大ナルモノナリ食スレバ辛辣殆ド煩
悶スベシ獼猴桃ノ熟シテ甘美ナルト同ジカラズ又越後古志ヨリ此花薔ノ鹽藏ヲ出ス微辛ニシテ香味佳ナリ』ト
ソコデ私ハ此實モ薔ノ鹽漬ニシタラ鹽漬ヨリハ尙ホ好カラウト思フ西洋ニテハ「ケパー」Caper 即チ *Capparis*
spinosa L. ノ薔ノ酢漬ヤ「イングリシ・ケパー」English Caper ト謂ッテのうぜんはれん即チ金蓮花 (*Tro-*
paolum majus L.) ノ實ノ酢漬ガアルガ日本産ノ右ノまた、びノ實ヤ薔ヲ能ク工夫シテ漬ケタラ日常ノ食膳ニ
供シテ相當趣味ノアル珍食品ガ出來ハセヌカト思フ又また、びハ其嫩莖ニモ辛味ガアルカラ此部モ亦利用シ得
ラルハト思フ

●たんきりまめ

今カラ百五十八年前ノ明和六年ニ出版シタル松岡恕庵ノ『食療正要』

卷一ニ「^{タンキリマメ} 稽豆」達曰ク稽豆ハ俗ニ^{シラシメマメ} 痰疎豆ト名ク莢長サ二寸許皮褐色ニシテ毛アリ毎莢ニ二粒アリ色黒シテ光アリ
吾ガ州ノ人^{シラシメマメ} 虱豆ト呼ブ一名^{ベニカワ} 紅皮一名^{ウイラウマメ} 外郎豆、藥食ノ用ニ入ル○達曰ク陳皮砂糖ト同ジク末シテ常ニ服スレバ痰
疾漸ク治ス」漢ト記シテアル文中莢長サ二寸許トアルハ恕庵其寸法ヲ誤ッテ居ル之レハ宜シク莢長サ五分許ト
訂正スベキデアル、岩崎灌園ハ其著『本草圖譜』卷四十三ニ今日吾人ノ稱スル黄花紫莢ノのさゞげヲ稽豆、た
んきりまめ一名^{ウイラウマメ} ちぢかはトシテ圖說シテ居ル、是レデ觀ルト恕庵ノたんきりまめハ *Rhynchosia volubilis*
Lour. カ *R. acuminatifolia* MAKINO. カヲ指シ灌園ノハ *Dumasia truncata* S. ET Z. ヲ指シテ居ル